

歴史的な分析におけるトレーニングを具体化する
：世界史におけるケース・スタディ
Getting Specific about Training in Historical Analysis
A Case Study in World History

担当：空 健太（岐阜高専）
sora@gifu-nct.ac.jp
kora@bu.edu

■著者情報

著者名：Peter N. Stearns

著者情報：（この本の執筆当時は）ジョージ・メイソン大学の副学長。その前はカーネギーメロン大学で世界史コースを教えていた。彼は世界史のよりよい学習効果に向けた教授の問題や経験について広く執筆してきた。アメリカ歴史協会（American Historical Association：AHA）の副会長を務め、いくつかの教育の賞を受賞している。社会史を専門としている歴史学者である。



■重要な用語

- ・ relatively 「比較の」
- ・ historical analysis 「歴史的な分析」
- ・ habits of mind 「心の習慣」
- ・ comparison 「比較」
- ・ The learning folks 「学習（科学）の人々」
- ・ parroting（*parrotting?）「意味もわからずまねる」
- ・ change over time 「時間上の変化（CoT）」
- ・ causation 「因果関係」

■ 概要

Stearns（2000）は、認知心理学者と協力した自らの大学での世界史コースの取り組みを報告している。特に、大学生が世界史における比較をどのように理解するのを助けることができるかについてに焦点を当てている。具体的な改善方法として、セメスターの早い段階からより多くの足場かけ（scaffolding）を組み込んだ演習を実施することで、比較の能力を向上させることができることを発見している。彼はまた、理論の検証や時間の経過とともに変化する問題を扱う能力も、比較の演習を応用した演習で向上させることができることを発見している。

本エッセイでStearnsがもっとも言いたいことは「世界史についての議論は、扱う内容の範囲についての議論から、生徒にどのような能力を育成することができるのかという議論へ発展していかなければならない」ということであると思われる。このエッセイで報告している自身のケーススタディがその事例として意味があるものとなっている。

- 要約 *以下の節番号とタイトルは便宜的に作成した。

1. 概要 (pp.419-420)

○歴史的な分析の作業に求められる比較の能力は、明示的な演習やその程度の測定、および計画されたステップによって向上させることができる。このことをカーネギーメロン大学の1年生の世界史コースでの実践を例に議論する。学生はおよそ300人、リベラルアーツと専門の学生を含む大規模なコースである。このエッセイでは、一連の分析的なスキルと学生のスキルの学習を促進するための方法について説明する。つまり、歴史的な分析における学生の能力に何ができるかのケーススタディである。

○これまでの私(Stearns)の関心は社会史のトピックなど内容にあったが、市民として私自身が生活の中で用いている歴史的思考の種類に明確に関心を払うようになった。内容にも未だ関心はあるが、焦点は、歴史教育と教員養成の議論、心の習慣 (habits of mind) の問題に多く関わるように再定義されなければならないことにある。

2. 世界史コースの問題 (pp.420-421)

○必修の世界史コースは、教える者に範囲に特に熱心になるように誘惑する。

- ・例えば、Dunn(2000)は、世界史のカリキュラムのポイントを示唆している。

○世界史は厚い教科書で、多くの情報を学生に提供することに重点を置いている。

- ・西洋文明に偏った重点という遺産との戦いを続けている。

○世界史の幅広い内容は、評価の手段が暗記のチェックになってしまう可能性があり、分析的なスキルに取り組む余裕がない。この問題状況は、高校でも大学でもどちらでも当てはまる。

○したがって、あらゆる世界史のコースは高度に選択的でなければならない。

- ・教える者の最初の義務は「あえて省略すること」("dare to omit") である。

3. Stearnsの初期の世界史コース (pp.421-424)

○そこで、3つの目標 (coverage goals) を念頭に置いて、世界史コースを運営する。

目標1：どの演習のベースにもなる一貫性のあるデータを提供すること。

目標2：現代社会で活動している人々が知っておく「べき」世界史についての知識はそれほどないということを確認すること。

(例えば、儒教とイスラム教の性質について、奴隷制とその正当化について、産業革命について)

目標3：学生が国民的・民族中心istではない国際的な視点を持てるようにすること。

(例えば、自分の社会や文化の問題について指摘できるようになり、西洋を賞賛したり批判すること)

→ (これらの目標からは) 全ての世界の社会と時代がカバーされる必要はない。

事実が管理可能な数の本質と観点から定義されれば、分析的な能力に取り組む時間が生まれる。

○初期のアプローチによる期待と失敗

- ・学生の能力への過度な期待があった。

例えば、インドのカースト制度を説明することと、それとギリシャの社会的不平等と比較することを学生はよく理解できていなかった。データを集めることと焦点化した分析を行うことを理解できていなかった。

→比較の原理についての学生の理解不足。

比較すること (make comparison) は、中心的な歴史の能力 (historical capacity) だとStearnsは考えている。

○徐々にコースを改善したが…

- ・それでもセメスターの中で、学生に継続的なスキルを身につけさせることができていなかった。

4. Stearnsの世界史コースの改革 (pp.424-430)

○認知心理学の応用が盛んなカーネギーメロン大学の学習強化センターとのコラボレーションを行った。

→目標とゴールを明確化すること (明確で利用可能な目標を設定)

- ・学習科学の介入 (intervention) = 学習科学の人々が目標が何か、生徒は何を獲得すべきかを尋ね、私

(Stearns) はそれを具体化した。また、歴史的な心の習慣は多岐に渡るため、優先順位を定め、特定の分析的なスキルを強調することを選択した。

○具体的な改善策：比較のための宿題 (Appendix21.1 pp.432-433)

課題1. 中国とインドにおけるジェンダーの関係 (コースの3週目)
(原文の読みとテキストに基づく)

指示：比較には2つのステップがある。つまり重要な特徴を特定すること、これらの特徴の間の類似や相違の評価である。

女性の役割と状況について記入する。

相違：中国のみ 相違：インドのみ 類似：両方に共通

(注意：両方の社会が家父長制的であるため、類似が多数あるということを口頭で指示し想起させる。この注意は、表の最初の欄が中国の特徴であるため、中国のあいまいなジェンダーの特徴を挙げるために自然な傾向である。この注意はかなりうまくいく)

課題2. (1週間後) イスラームの中東と中国の比較

生徒は、ある社会についての情報をグループ化するために、社会的・政治的・文化的・経済的なカテゴリーを導入する。

イスラームの中東：主な特徴 (社会的、文化的、経済的、政治的)

(図はそれぞれのカテゴリーを強調させる)

中国：図を使用して各カテゴリーの類似点を比較する

中国：図を使用して各カテゴリーの相違点に注目する

○改善策のように、分析の目的を明確に示し、思考方法を強化するための同様の明示的な課題を実施すると、過去5年間でコースの生徒は比較を行うことがはるかに容易になった。このことはプレ・ポストテストで確認された (Appendix21.2 p.433)。

○なぜこのような課題が有効か？

→学生に社会の特徴 (例えば、文化、政治) を分解させ、それらを他の社会のそれらと並置させることで、学生は根本的に異なる設定で比較の基本的手順を繰り返すことができる。

○さらなる改善策：比較の能力のために開発した課題を別のカテゴリーの能力にも応用した。

・ 関連性のあるデータを分析し理論を検証する (theory testing)。

→理論の検証の課題例 (Appendix21.3 pp.433-434)

・ 中核の社会と周辺社会が持っていると思われる政治と経済的な特徴を図化させ、近世イギリスと近世サハラ以南のアフリカの政治と経済的な特徴を図化させる。生徒に短いパラグラフで結論を書かせる。

・ 19世紀のラテンアメリカの発展について、世界経済と近代化理論の両方から導かれる予測に照らして評価し、どちらの理論が当てはまるかそれともどちらも当てはまらないかを考察させる。

・ 時間の経過とともに変化する (change over time) 問題を扱う方法の学習。

2つの社会の比較と変化の課題例 (Appendix21.4 p.434)

・ 20世紀の日本と20世紀のサハラ以南のアフリカにおける永続する伝統的・文化的な特徴 (例：1990年代における1900年とほぼ同じ特徴) を図化させ、強調したメモを図につけ、変化してきた特徴を示していく。それから、2つの事例における文化の変化のパターンの間にある違いを説明するために、近代化理論がどのように役に立つかについての1パラグラフを書く。図はうまく機能するが、比較の結果を理論の評価に混合するとより複雑な結果が得られる。

○最後の改善：歴史的な因果関係 (historical causation) の評価

→ただし、因果関係は変化とは対比的に、明らかに比較とは無関係のカテゴリーであった。だから比較の演習を繰り返しても因果関係について明示的に学習していなければうまくいかない。そこで次のような因果関係の演習を開発した。

→因果関係についての演習 (Appendix21.5 pp.434-435) *開発途上。

・生徒は、儒教の初期の強調のいくつかの考えられる原因（他の地域からの影響、孔子の独特な才能、周王朝の政治情勢、農民の抵抗者によって発生した要求など）の中から、教科書中のページを参照して選択する。それから、儒教が原因となった結果を選択し決定する。

・ヨーロッパの封建主義の可能性のある原因（度重なる戦争、キリスト教、ローマの伝統、武器の性質、強い君主制）の中から、もっとも関連性の高い2つの原因を選ぶ、他のものが重要でない理由を説明する。それから、Carlo Cipollaの短編“Guns, Sails and and Empire”（1996年）を使用して、1450年以降のヨーロッパの拡大の原因について最も説得力のある説明（貿易の均衡、中国の権力への恐怖、技術の変化、アジアにおける新たな弱さ、製造における蒸気機関の使用、ヨーロッパにおける政治的対立）を選択する。生徒はこれらの要因のいくつかが原因として機能する理由と、そうでない理由があることに気づくことになる。

5. 終わりに (pp.430-432)

○なぜ歴史（世界史）を教えなければならないか？

→Stearnsの答え：知識や世界的な視点も重要だが、生徒が新しいデータや問題(issue)を応用できる理解や能力を持てるようにしなければならない→それは市民や労働者として有効である。

→このエッセイでの分析能力の演習は役に立つと思われるし、高校でも実施していく必要がある。

○近年の世界史についての議論

・範囲は見方についての議論に焦点が当てられている（例えば、西洋中心主義の克服）。

・しかし、この議論はおそらく廃れる。州のカリキュラム・スタンダードが実質的に普遍的なものとなっていくだろう。

・むしろ、世界史カリキュラムの中で、どのようにの分析能力の育成の向上を保証するかという議論へと進む必要がある。